

表参道日記

85

『人工知能(AI)を医師の味方に』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

人工知能(artificial intelligence: AI)に関する様々な報道が成され、関心や期待が高まっている。そして反面、人間の仕事が複数個所で奪われるのではと恐れられており、その多くがサービス業である。

そこで、全ての職種が舞台と楽屋に分かれるものと決めつけられ、確かに天才的知能を持ったAIの出現以前、製造業では、精密な産業用ロボットやコンピュータ技術の進歩に伴い、既に製品となる前の段階で、機械が人の仕事と置き換わっていたのであろう。

そして当然、次の対象はサービス業であらう。とは言え、身近な公共サービスを考えても、すでに様々な場所で人の仕事が機械仕事に置き換わっている。

例えば、小生が子供の頃には鉄道やバスを利用する際、対面で人から切符を買う、切符切りの改札を通して乗車するのが常であった。あの人たちは、その後どうしたのであろうか。

そう言えば、「ワンマンバス」なる呼び名もいつのまにか死語となったが、自動運転が完璧になれば「ノーマンバス」が普通になるのであろうか。

また、銀行でお金を振り込んだり、引き落とししたりできるサービス機器のATM。こちらでも随分前からタッチパネルに置き換わっている。

そこでは口座の残高が潤沢であれば大金を引き出せるし、無ければ金は出せないわけだ。もし、この現場におせっかいなAIが導入されれば、「今月は使いすぎだから節約しろ」とか「もっと気前よく使え」と指示するのであろうか。さらに振り込め詐欺などをその場で逮捕できれば凄いことだ。

そこで、我々の診療現場に仲間としてAIが加わった場合いかにして迎えられるか。

現在、世界中で、様々な医療の場面でのAI有効活用が研究されている。そしてその多くが、医師の診断や判断を補助するツールとしてAIを活用するものだ。

AIは大量の情報を解析することを得意とする。こうした特性からも、様々な症状や病歴、身体所見、検査所見から鑑別疾患を挙げ、診断に結びつける初診患者の鑑別診断に役立ててほしい。積極的意見が、日頃から初期診療に携わり、高い精度で効率よく鑑別診断

を行うべく救急医や総合診療医より集まっている。

そこで当然のこと、全ての例で、経験や勘、責任感、気持ちの把握などが、人間同士が向き合うところの医療であるわけだが、優れた味方としてのAIは歓迎したい。

東大入試に合格するAIや、プロ棋士に勝つAIより、その存在は意義深く思う。そして、出来れば日本製であって欲しい。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院www.ito-hospital.jp 大須診療所(名古屋分院)www.osu-shinryoujyo.jp

